

初めての海外医療ボランティアで得た 誇らしい気持ちを胸に

最大級のお礼「キス」に気恥ずかしさを感じて



横浜市西区
一般財団法人 けいゆう病院
神奈川県警友会
すずき こうたろう
部長 鈴木 浩太郎

「コータロー、今年モンゴルに手術しに行かない？」と、大学医局の先輩である藤島浩先生（鶴見大学教授）に声をかけていただいたのは、2024年2月の初め、まだ肌寒い頃だった。その後、日程の連絡を受け、6月の予定を確保した。詳しくお話を伺うと、実は藤島先生と楊浩勇先生（医療法人健究社スマイル眼科クリニック理事長）を中心に活動がされている「NPO法人ファイトフォービジョン」が、3年をかけてモンゴルの政府関係者、地域、病院とさまざまな準備をゼロから始め、現地では元横綱・日馬富士ことダワーニャム・ビャンバドルジ氏の協力を得て話が進んでいたようだった。そして、今年（2024年）に初めてモンゴルで手術などの医療ボランティアを行なうことを知り、身の引き締まる思いに変わった。

モンゴルは日本の約4倍の面積があり、首都ウランバートルを中心に発展、人口は約350万人で、そのおよそ半分がウランバートルに集中している。ウランバートルには近代的な病院やクリニックがあり、高度な医療が提供されている一方で、地方では眼科医師や専門機器が不足しているなど、その医療事情には大きな格差がある。特に高齢者に多い白内障や翼状片は、非常に進行していることが多く日常生活に大きな支障を来す。しかし、手術を受けるために患者さんは都市部の病院に行かなければならず、その移動や費用を理由に治療を諦めている。われわれは、ウランバートルを取り囲むように位置するトゥブ県の県立病院で手術治療のボランティアを行なうことになった。

私を含めて4人のメンバーで成田国際空港を出発し、5時間弱でチンギスハーン国際空港に到着。日本との

時差は1時間ほどで2021年完成の空港は予想外に近代的できれいだった。そして、整備された一本道の高速道路を車で1時間ほど走り、ウランバートルのホテルに着いた。目的地に到着できたことに少し安心し夕飯時にビールを飲むと、標高約1300mのせい、少量で酔っ払ってしまった。

翌朝、現地の協力先病院に向かい、協賛企業から寄付された眼内レンズや、個人の先生から寄贈いただいた手術機器の起動を確認した。顕微鏡を組み立ててオートクレーブも設置したが、用意されていた変圧器の調子が悪かったのか、突然煙が出てきたので慌ててすぐに電源を落とした。そして、手術予定の患者さんの診察を行ない、白内障6件（うち、成熟白内障4件）、瞳孔径がふさがりそうな翼状片8件の計14件が手術予定となった。診察した患者さんの全員に角膜実質混濁を認めたため、現地の医師にその理由を尋ねたところ、



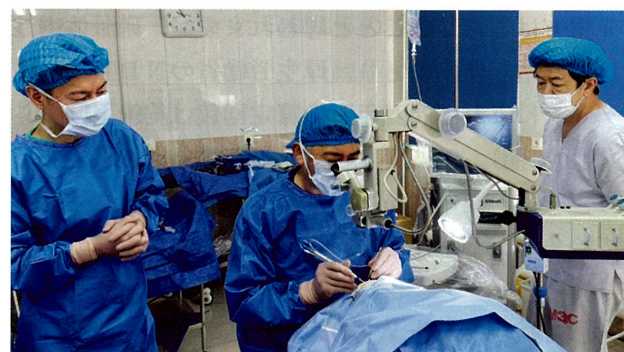
元横綱・日馬富士ことダワーニャム・ビャンバドルジ氏を囲んで、右端が藤島浩先生、中央左が私



患者さんたちと



手術予定の患者さんを診察



手術室にて、執刀中の私

風と紫外線の影響による「風土病」と言われたことが印象に残っている。

モンゴルでは、手術の際、眼科医師は各疾患の資格を要し、それぞれ取得するのに2年以上の研修を必要とするそう。白内障の手術資格を取得していても、翼状片や硝子体手術は行えない。現地での手術は、川北哲也先生（北里大学北里研究所病院部長）と私が白内障を担当し、藤島先生に翼状片の患者さんを担当していただいた。

私は1日約40件の手術を行なうが、日本からモンゴルへ持参した顕微鏡は、外眼部の処置用であったため、X Yの操作や拡大率の変更ができず、白内障手術の実施に少し不安を覚えた。そして、それは若い頃の緊張を思い出させ、私は背中に汗をかいた。わざわざモンゴルまで来て合併症はあり得ない。地元の女性医師たちが顕微鏡の横からのぞき込む。彼女らにとってもなかなか接することがない機会、真剣勝負だ。手術が終了し、「無事に終わりました」と伝え、患者さんたちの表情は急に柔らくなる。全員の手術が終了した時にはかなりの疲労を感じたが、片づけ後、病院長室に集まり、事故なく無事に手術治療ができたことを皆で喜び、昼間からウオッカで乾杯をした。

3日目は朝から術後の診察だった。両眼が成熟白内障



最大級のお礼を受けて

障だったおばあさんは、眼帯を取った途端に表情が一変した。目を開けた瞬間、鮮明に見える景色に驚いている。分かりきっていたことではあるが、この喜びを共有できることが嬉しい。突然、私の頬を触ってキスをしてくれた。最大級のお礼らしいが、なんとも気恥ずかしい。そして、協賛企業から寄付していただいた点眼薬や保護メガネを説明して渡すと、皆、本当に喜んでくれた。

われわれの活動の評判を聞き、来年に手術してほしいとたくさんの方が受診した。その中には網膜色素変性症の患者さんも数人いて、近親婚などの問題を疑った。全員を診察し、治療可能な患者さんの手術予定を立てたので次回はもっと忙しくなりそうだが、前述の顕微鏡をまた使用するかもしれないということが唯一の心配事だ。

私は今回初めて海外医療ボランティアに参加したが、成田国際空港に帰ってきた時に「なんだか良いことをしたな」と誇らしい気持ちになれた。そして、来年は後輩にも声をかけ、また頬にキスをしてもらいにモンゴルに行こうと心に決めたのだった。